

# PETRONAS SYNTIUM TEAM

## PETRONAS SYNTIUM TEAM REPORT

スーパー耐久シリーズ2008  
第6戦「スーパー耐久 SUGO500kmレース」  
2008年11月1-2日

■予選:11月1日 天候:晴れ 気温19°C(午後1時現在)

9月上旬の戦いからはや2ヶ月あまり。スーパー耐久シリーズ2008も大詰めを迎えつつある。今回は、舞台を東北・宮城のスポーツランドSUGOへと移し、タイトル争いはもちろんのこと、勝利へ向けて貪欲な戦いを繰り広げた。

PETRONAS SYNTIUMチームでは、前回、岡山戦を怪我で負傷したファリーク・ハイルマンが無事復帰。自身、8月以来となるレース参戦となったが、金曜日に行われた3セッションの専有走行から精力的に走り込み、モチベーションを高めていった。そんな中、No.50 PETRONAS SYNTIUM BMW Z4M COUPEをドライブする柳田真孝が総合でトップタイムをマーク。もう一台のNo.28 PETRONAS SYNTIUM BMW Z4M COUPEもトップタイムに僅差で続き、手ごたえあるセッションを終えた。

迎えた土曜の予選。朝から青空が広がり、やや風は冷たいものの晩秋の穏やかな天気恵まれた。午後1時20分、Aドライバーによる予選がスタート。PETRONAS SYNTIUMチームではセッション開始とともに28、50号車がコースインし、アタックを開始する。計測3周目、まず50号車のアタッカー、ハイルマンが1分25秒735をマークし、全車のターゲットとなるトップに立った。するとこれに続くように28号車の谷口信輝が計測3周目に1分25秒040をマーク。総合トップに躍り出た。その後、2台ともタイムを更新することなく、28号車が暫定トップ、そして50号車が暫定4番手に落ち着いた。

ST-3、4クラスの予選をはさみ、午後2時5分よりBドライバーによる予選がスタート。さらに雲が減り、気温も路面温度も緩やかに上昇、これがさらなるタイムアップにつながった。コースがクリアなうちにアタックを行うため、早めのコースインを行った28号車の片岡龍也は計測3周目に1分25秒025のタイムをマークし、トップに浮上。Aドライバーとの合算タイムで確定するポールポジション獲得の実現に向け、ライバル達をリードする。これに対し、50号車の柳田真孝はコースインのタイミングをやや遅らせる。ライバルたちがひと通りアタックした後にコースインし、その中で柳田はまず1分25秒048のタイムで2番手につける。そしてさらにもう1周アタックを続け、計測3周目に1分24秒671をマーク！唯一24秒台へ乗せることに成功した。結果、50号車の柳田を先頭に、28号車の谷口が続き予選を終了した。なお、2ドライバーの合算タイムにより、28号車がタイムアタックによる今季2度目のポールポジションを獲得。一方、50号車は2番手。チームにとっては、第3戦以来、今季2度目のフロントロー独占による決勝レースを迎えることになった。

■決勝:11月2日 天候:晴れのち曇り 気温18°C(正午現在)

前日より一段と冷え込みが厳しくなった日曜日のスポーツランドSUGO。だが、すっきり空も晴れわたり、さすがに山ろくからの風は冷たいもののレース日和の朝を迎えた。

正午ちょうどに135周のレースがスタート。まぶしい日差しが照りつけるも、最終コーナー奥の空が重苦しい灰色の様相を見せている。そんな中、ローリングスタートから1コーナーへと向かったフロントローのPETRONAS SYNTIUM BMW Z4M COUPEの2台は、早速28号車の谷口と50号車の柳田がサイド・バイ・サイドの激戦を展開していく。

緊迫した2台のポジションが入れ替わったのは、バックストレッチ先。50号車の柳田がトップを奪取し、オープニングラップを終えた。レースはその後、着かず離れずの攻防戦になるものの、柳田が終始攻めの走りに徹し、トップを死守。このまま45周目のピットインを迎えた。

ハイルマンへとドライバースイッチし、タイヤ交換、給油を済ませた50号車がコースへと復帰。するとその2周後に28号車がピットインを行い、片岡へと交代した。この交代劇で一度は28号車がトップを奪い返したが、今度は50号車のハイルマンがコース上で28号車の片岡を逆転。上位陣のピットインがすべて終了すると、28号車が再びレースを牽引することとなった。

だが、今回勝利すればシリーズタイトルが確定する28号車の片岡は、50号車のハイルマンの後塵に拝することなく果敢な攻めを披露。66周目にトップを奪うと、93周目を終えて行った2度目のピットインまでトップを守りきった。一方、50号車はその1周前にピットイン。まさにチームメイト同士の“ガチンコ勝負”にピット内にも緊迫した空気が流れた。

# PETRONAS SYNTIUM TEAM

2台の最後のルーティンワークが無事終了。50号車の給油時間が28号車より長かったこともあり、依然28号車のリードは変わらない。105周目、他チームのクルマがルーティンワークに入り、28号車の谷口が改めてトップに立った時点で2位50号車の柳田との差は5秒弱。チェッカーまで30周、ここから2台による真っ向勝負が幕を開けることとなった。

いつしか1秒を切った2台の間隔。スピードで勝る50号車の柳田が123周目にトップを奪い直し、28号車の谷口を引き離しにかかろうとする。だが、谷口も喰らい付くだけでなく、隙あらば逆転を狙う体勢で柳田をマークする。そして、2台による激しい攻防戦に動きが出たのは132周目の2コーナー。並走から若干リードしかけた28号車と50号車がまさかの接触。50号車はコース上に踏みとどまったが、28号車はスピンを喫し、タイムロス。2台の差が大きく開くことになり、50号車の柳田がトップで、そして28号車の谷口が2番手でチェッカーを受けた。

なお、レース後、2台の接触において、50号車にはペナルティが科せられ、トータルタイムに35秒加算が決定。この結果、28号車が優勝、50号車は2位となった。これにより、28号車のST-1クラスチャンピオンが決定。PETRONAS SYNTIUM チームが念願のタイトル獲得を達成した。

最終戦はこの第6戦からわずか2週間後。戦いの舞台、もてぎは日曜日にオーバルコースを利用したエキシビジョンレースが行われるため、土曜日に予選と決勝を行うワンデーレースを開催。PETRONAS SYNTIUMチームは、50号車のチャンピオンに続き、28号車のランキング2位獲得を目指し、戦いに臨む。

## ●鈴木哲雄監督

今回は、50号車のセットアップが良かったこともあり、決勝では28号車との接戦になりました。チームとして2台が競い合っただけでレースをするのがベストだという考えのもと決勝を迎えたわけですが、レース中の駆け引きをはじめ、いいバトルを見せていたと思います。2度目のルーティンワークは50号車のほうが28号車より長めの給油になりました。最後は接触という形になって残念ですが、これもレースで真剣なバトルをしていたからこそ。結果的に28号車のチャンピオンが決定したことをチームとして喜ばたいと思います。

## ●No.50 PETRONAS SYNTIUM BMW Z4M COUPE

柳田真孝

まず28号車の谷口、片岡両選手のシリーズチャンピオン獲得と、タイトルを獲得したPETRONAS SYNTIUMチームにおめでとうをいいたいです。今回は、クルマの調子が良く、速さもあったので菅生での戦いを勝ちたいという気持ちでいっぱいでした。スタートでトップに立つことを狙っていましたが、つねに攻めのレースをしようと思いました。ファリークも復帰戦ながら最後までいい仕事をしてくれました。しかしながら、最後にはチームメイト同士で接触するきっかけを作ってしまったことに関しては、申し訳ないと思っています。気持ちを切り替え、最終戦では改めてレースでの勝利を狙いたいと思います。

ファリーク・ハイルマン

28号車の片岡サンとのバトルはとても緊張しました。プレッシャーも大きかったし、とてもハードでした。残念ながら抜かれてしまったのですが、後方から片岡サンの走りを見て、たくさんのことを学ぶチャンスになったのは良かったと思います。今日は勝利を逃してしまい残念でしたが、28号車がシリーズチャンピオンになれて良かったと思います。最終戦は勝てるよう頑張りたいと思います。

## ●NO.28 PETRONAS SYNTIUM BMW Z4M COUPE

谷口信輝

今回は50号車のほうがすごく調子が良かったようで、僕たちの28号車はスピードで負けていました。レースで終始熾烈な戦いになって、最後は残念ながら2台が接触し、その影響で僕はコースアウトしたわけですが、なんとかコースに復帰し、チェッカーを受けることができたからこそ優勝し、そしてシリーズチャンピオンになれたのは良かったと思います。今年はチームにチャンピオンを獲得するという指名を受けてきたわけなので、その仕事ができる良かったと思います。

片岡龍也

レースでは2台が真剣勝負を繰り広げることになりました。ちょっと残念な展開になりましたが、チャンピオンが獲れたことはうれしいです。タイトルを獲得することを目標にがんばってきたし、それが僕たちの仕事だったので、それができて良かったと思います。